



日本プライマリ・ケア連合学会
四国ブロック支部 活動報告

発行人：支部長 板東 浩
きたじま田岡病院／徳島大学

★1 高知大会を終えて：

高知医療センター地域医療科 澤田 努 (支部大会事務局長)

日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部大会を高知市で開催しました。2013年10月19日(土)、20日(日)の2日間にわたって、第13回日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部大会、第20回四国地域医学研究会 合同集会(大会長 高知大学医学部家庭医療学講座教授 阿波谷敏英先生)を高知市で開催しましたので報告致します。

今回の高知大会では「これからの日本の医療の話をしよう!」をメインテーマに掲げて、これから我々は何をすべきなのかについて議論を行いました。高知県では、全国よりも約10年高齢化が進んでおり、地域医療の厳しい状況も改善の糸口が見えないわが国の医療は、施設重視から地域・在宅へ、専門化から総合診療へのシフトが求められています。3年後に開始が予定されている新しい専門医制度では、総合診療医が19番目の基本専門領域専門医となることが決定したことも、こうした流れが視野に入っているものと思われます。地域でプライマリ・ケアを担っている医療者、多職種の方、大学関係者、医学生など多くの方々を含めて約150名近い方々にご参加いただき、大変盛況な高知大会となりました。

基調講演では、自治医科大学学長 永井良三先生から、「日本の医療をめぐる課題と動向」のご講演をいただきました。少子高齢化と低経済成長がわが国の医療の在り方に大きな影響を与えているデータをお示しいただき、社会保障改革国民会議で出された報告書の中で、高度急性期から在宅介護までの一連の流れによる地域完結型の医療、病床の機能分担、地域医療ビジョンの策定など多くの課題をご紹介されました。我が国独自の医療提供体制を医療者だけでなく、地域住民や行政と共に構築していく必要性と共に各医療機関は各々の地域特性に見合った医療を構築し、提供していく必要があることを強調されていました。

この講演を踏まえて、その後5名のシンポジストをお招きして様々なお立場から先進的な取組みをご紹介いただきました。司会は香川県綾川町国保陶病院長である大原昌樹先生に、また助言者としては徳島県保健福祉部健康増進課長である鎌村好孝先生にお願いをしました。

まず、最初にご登壇いただいたのは、医療法人ゆうの森理事長である永井康徳先生から、多死社会を迎えるにあたり、3つの医療変革が求められるというご提言をいただきました。一つ目は、治せない病気や死、老化にしっかりと向き合うこと、二つ目は住み慣れた自宅や施設での看取りの選択肢もあること、三つ目は家族や医療従事者だけで方針を決めずに本人の生き方にしっかりと向き合う医療を提供する必要があるということを具体的な事例を挙げてご提言いただきました。

続いて、生き生きサポートセンターうえるば高知で、障がいがあっても高齢になっても誰もが自分らしく暮らせる高知を目指して日々活躍されている宮坂千種先生にご登壇いただきました。福祉機器を利用者のニー



ズに合わせてマッチングさせることで、その人らしい生活の実現が可能となった事例も数多くご紹介いただき、こういった地道な取り組みをコツコツと積み重ねられ、ノーマライゼーションに向けて日々頑張っておられる姿に感銘を受けました。

次は、訪問看護ステーション希望で所長としてお勤めされている小松君子さんにご登壇いただき、在宅介護18年の経験から実際に関わった数多くの事例を具体的にご提示いただき、在宅医療と訪問看護の実情や役割、課題などをご提示いただきました。地域ごとに在宅医療のネットワークを確立していくことの必要性を強調され、まさに永井学長先生のご提言に沿った具体的な取り組みについてご紹介いただき大変参考になりました。

続いて、実際に認知症のお母さまを18年間にわたって在宅で介護をされた経験を持ち、現在は認知症の人と家族の会で高知県支部の世話人代表を務めておられる佐藤政子先生にご登壇いただきました。認知症高齢者の生活を介護保険のサービスに当てはめるだけではなく、その人が生きるために必要なサービスをその人の思いを中心にしてうまくコーディネートしていくことがこれから求められる認知症ケアであることをご提言いただきました。本人の生きる力を引き出すために、関係者が自分の価値観や都合で関わるのではなく、生きることを支援するために認知症高齢者をよく知ることからはじまることを強調されていました。



最後に、医療経済学的な視点から早稲田大学政治経済学術院教授である野口晴子先生にご登壇いただき、地域による空間的な資源偏在や二次医療圏の設定と地域住民の受療行動の関連、地域医療機関の不在と地域住民の受療行動の関連など高齢者の生活空間と医療・福祉（介護）の連携に対する地域包括ケアの可能性について様々な視点からの検証結果をご紹介いただきました。その後、徳島県保健福祉部健康増進課長である鎌村先生にも加わっていただき、今回のメインテーマについて熱い討議が繰り広げられました。

2日目は4つのセッション（救急・へき地医療支援、医学教育・臨床Ⅰ、臨床Ⅱ、地域包括ケア）に分かれて四国四県から計24題の発表をいただきました。

また今回の高知大会では、2つの新しい取り組みをはじめました。1つは、学生・研修医を対象とした臨床推論ケースカンファレンスで、『総合診療医ドクターG』のような臨床推論セッションです。ケースプレゼンターは佐野良仁先生（佐野内科リハビリテーションクリニック院長）です。もう1つは、学会認定後期研修プログラムの後期研修医のポートフォリオ発表会です。四国ブロック支部には10の後期研修プログラムがあり、こういった取り組みをきっかけとして四国内の相互交流をおこない、プログラムの質向上に引き続き努めていきたいと考えています。

最後になりましたが、この場をお借りしまして高知大会の大会長をお務めによられた高知大学医学部家庭医療学講座教授 阿波谷敏英先生をはじめ、事務局をお手伝いいただいた24名のスタッフの皆さまに対し、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。来年は徳島大会で皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

★2 高知大会：臨床推論ケースカンファレンス報告（10月19日）：

佐野良仁（佐野内科リハビリテーションクリニック／高知県香美市）

ここ近年のカンファレンス形式において、『インタラクティブ（双方向性の）ケースカンファレンス』が各地で盛んにおこなわれるようになっております。単なる座学で与えられるだけの学習ではなく、その場に参加

し、共に考えて、診断に至る過程を共有していく方法です。最初から検査だけに頼る事ではなく、鑑別診断を検討して行き、確定診断に迫るための必要最小限度の検査を選択する作業は、効果的かつ重要な学習方法です。四国においてもそれぞれの県で、医学生や初期臨床研修医、若手医師を中心として、ケースカンファレンスが行われています。

そこでこのたび、四国ブロック大会の初めての試みとして、四国四県の医学生・初期研修医が参加して発言・検討する『日本プライマリ・ケア学会四国ブロック大会 臨床推論ケースカンファレンス』を高知大会にて開催しました。15名の医学生・研修医の参加の中、「左手掌のしびれ」を主訴とする外来症例を検討しました。(カンファレンスの詳細は、日本プライマリ・ケア連合学会四国支部論文集に掲載予定です。)



総合司会として、高知大学医学部附属病院総合診療部准教授・武内世生先生にファシリテートをしていただき、5つに分けたグループから活発な発言がなされ、鑑別診断を挙げたうえ、身体所見を検討し、最終診断に到り、検査結果にて確認しました。

今回、初めての試みでしたが、医学生・研修医のみならず、フロアで聴講していた学会員からも「これは勉強になった、良かった、また次回からも継続して開催しよう！」との声が多数寄せられました。今後、四国四県で開催するたびに、毎回継続して開催する予定となり、地域医療を実践しているプライマリ・ケアに携わる臨床医が、ともに若手医師を育成しながら自らも学習継続して行く方法の一つとして、定着して行きそうです。

四国はまさに、“志^{こころ}国(こころざしのくに)”とも書き換えられます。志しを持った、地域に根差した総合診療医が、この四国で一人でも多く育てゆく事を会員一同願っています。

★3 美馬市民地域防災訓練への参加報告(徳島)

美馬市国民健康保険木屋平診療所 藤原真治

平成25年10月13日(日)、美馬市の主催にて、住民、地域の自治会や防災組織、消防、警察、自衛隊、徳島大学、医師会、歯科医師会など関係者をあわせ約600名が参加した防災訓練が実施されました。会場の美馬中学校には、炊き出し訓練、地震体験車による地震体験、煙体験ハウスによる煙体験、初期消火訓練、心肺蘇生研修、災害派遣特殊車両の展示など多くのサイトが設置されました。

この防災訓練の中で、県から当地の災害時医療コーディネーターに指名されている半田病院・河野誠也先生の指揮にて、トリアージ訓練と陸上自衛隊ヘリコプターによる搬送訓練が実施されました。筆者も黄色タグの受傷者を担当する医療スタッフとして訓練に参加しました。

訓練には、美馬医師会の先生方をはじめ、地元の半田病院、ホウエツ病院、徳島市からは徳島市民病院や田岡病院など、県内の広い範囲からDMATチームのスタッフに参加されていました。訓練に際して、被災地での支援活動で重要な役割を担うロジスティクスが当地の各医療機関で事前に仮登録され、当日は防災対策本部設置訓練やロジスティクスへの情報伝達訓練も同時に実施されるなど盛りだくさんの内容でした。被災地で大切な業務となる検死についても、徳島大学法医学教室や歯科医師会の先生方の協力を得て訓練が行われました。



東南海・南海地震の際、山間地域では多数の小集落の孤立が問題になると予想されていることなども踏まえ、

今後、さまざまな想定で訓練を行う予定にしているそうです。

★4 「西予市地域医療セミナー」(愛媛)

愛媛研究会 川本龍一

2013年9月1日、愛媛県西予市における地域医療の現状を理解し、これからの地域医療の在り方について考えることを目的として、敬作とおイネの会実行委員会主催により開催された。わたくしからは「これからの地域医療の在り方について」と題して、地域医療の現状を分析し今後の予想される状況のなかでこれからの地域医療の在り方に講演しました。

愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター長の高田清式先生からは「愛媛県における地域医療の現状と課題」と題して、愛媛大学医学部卒業生の県内での活動状況、医学生に対する地域医療教育の現状、新病院に対する期待などについて詳しく御講演いただきました。その後、医師会長である三好康司先生、西予市市民



代表、宇和病院副院長の菊池良夫先生、野村病院院長の守田人司先生、そして地域医療学基礎配属の上本明日香さん・小糸秀さん・鈴木萌子さんより西予市地域医療への提言が行われた。

満員の会場からもたくさんの質問があり今後の西予市の地域医療を考える上で有意義な会でした。

★5 香川PC研究会から(香川県)

陶病院 大原昌樹

平成25年度香川プライマリ・ケア研究会が、平成26年2月11日(火・祝)13:00~16:30、JRホテルクレメント高松3階「玉藻」(JR高松駅前、☎087-811-1111)において開かれます。

一般演題は、行政を含めた10職種から10演題で多彩な分野の発表があります。特別講演は「リハビリテーションの目的とその役割」ということで、NTT東日本関東病院リハビリテーション科部長、稲川利光先生にご講演いただきます。

先生は、理学療法士として3年間福岡市内の病院に勤務。地域で訪問リハビリなどに取組み、遊びの要素をリハビリに組み入れた「遊バリテーション」という言葉を生み出しました。その後、医師を志し、1987年香川医科大学に入学されました。

医師として、急性期から緩和ケアまで広くリハビリに取り組み、嚥下障害などの後遺症を早い段階で予防しながら、患者さんのQOLの維持・改善に努めておられます。

著書に『あんたは名医だ』(筒井書房)、『老人ケアの元気づくり』(医学書院)、共著『遊バリテーション』(医学書院)などがあります。

また、NHK Eテレ「ハートネットTV」などでもご活躍です。楽しくてためになる講演ですので、是非ともご参加ください。

平成25年度香川プライマリ・ケア研究会講演会

時下 益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、地域ケアに関わる保健・医療・福祉関係者等の相互理解を深め、連携・協働の促進を図るための合同研修会を下記要領にて開催することとなりました。

つきましては、医療関係者の皆様に多数ご参加いただきたく、ご案内申し上げます。

尚、定員は設けませんが、資料等準備の都合がございますので、参加ご希望の方は、裏面申込用紙にてお申込下さいますようお願い申し上げます。

記

日 時：平成26年 2月11日(火・祝)午後1時~4時半

場 所：JRホテルクレメント高松 3階 「玉藻」

〔高松市浜ノ町1-1 ☎087-811-1111〕

内 容：①特別講演

「リハビリテーションの目的とその役割」

NTT東日本関東病院リハビリテーション科部長

稲川 利光 先生

②一般演題約10題発表予定

単 位：日本医師会生涯教育講座-3. 5単位

日本プライマリ・ケア学会専門医・認定医更新-3単位

主 催：香川プライマリ・ケア研究会

《問合せ先》
香川県医師会事務局
Tel 087-823-0155 Fax 087-823-0266
E-mail chiiki@kagawa.med.or.jp